

京都で、
会いましょう。

ICC

国立京都国際会館

Kyoto

— 2017 Autumn —

巻頭インタビュー

一般社団法人ザ・クリエイション・オブ・ジャパン
代表理事(元文化庁長官)

林田 英樹 氏



Kyoto International Conference Center

林田 英樹 氏

日本工芸会理事 長

一般社団法人ザ・クリエイション・オブ・ジャパン代表理事

1942年鳥取市生まれ。京都大学法学部卒業後1966年文部省（現：文部科学省）入省。文化庁長官、宮内庁東宮大夫、国立新美術館館長などを歴任。現在は日本工芸会理事長、一般社団法人ザ・クリエイション・オブ・ジャパン代表理事などを務める。また「工芸の祭典」21世紀鷹峯フォーラム」など100年後に残る工芸のために活躍中。



オールジャ・パンで繋いでゆく
未来の日本工芸のために

歴史と伝統ある 日本の工芸を次世代へ繋ぐ

木下博夫館長（以下、木下） 林田さんは元文化庁長官を務められ、退官されてからも現在に至るまで日本の工芸を育み上げていく事業に密接に関わっておられます。まず、林田さんと工芸との関わりからお聞かせ願えますか。

林田英樹氏（以下、林田） 工芸と関わりができたのは文化庁時代です。文化財保護の仕事も含めて6年間、ここで工芸についての勉強をさせていただき、多くの工芸と関わる機会をいただきました。工芸を含む日本の美術は、19世紀中頃の欧米の美術にジャポニズムと呼ばれる大きな影響を与えました。日本の工芸は、素晴らしい歴史を持ち、そして現在でも多くの優れた作品が世に出ているのですが、これをいかに次世代へと繋いでいくかということを考えています。

木下 林田さんが中心となって進めておられる、100年後に残る工芸をテーマにした「21世紀鷹峯フォーラム」。2015年に行わ

れた第一回京都開催では、国立京都国際会館でもシンポジウムを行いました。日本文化の発信にも力をいれていきたい我々にとって印象深いものとなりました。

林田 現代社会は生活の様式が変化し、畳や床の間などの工芸が使われる場面が少なくなっており、危機感が高まっています。また、これを打開してもっと工芸品が使われるようにするには、文化庁だけでなく経済関係の官庁など、様々な関連機関が連携して進めていかなければならない状況であることも痛感しています。そこで、日本の工芸が100年後にも残るようにするために、私が代表理事となって一般社団法人ザ・クリエイション・オブ・ジャパンを作りました。ここでやっている一番大事なことは、工芸関係者がこの厳しい状況について共通認識を持って、違いを乗り越えて協力・連携して取り組むことと、多くの人に日本の工芸の素晴らしさを体験し、使ってもらえるような、意義ある企画を進めていくことだと思います。そのために、平成27年、琳派400年に沸く京都の地で、「21世紀鷹峯フォーラム」と名付けて活動と呼びかけたところ、20の国公私立の美術館、博物館、大学などが協力してくだ

割竹の繊細な装飾を施した照明が照らす、板目が美しい「角網代」の天井（写真左）や、凹凸のある陶板を真っ平らに仕上げた床（写真中）など、随所に趣を感じる茶室「宝松庵」（写真右）で対談が行われました。



さり、25のイベントが開催出来て、とても良いフォーラムとなりました。京都で最初のモデルが出来たので、その後の東京そして金沢へと繋いでいるところです。

各都市の特色を活かした 魅力的なフォーラム

木下 つくり手だけが頑張っても、工芸の未来の発展は非常に厳しいように思います。工芸を100年後にも残していくためには、具体的課題として何をしなければなりませんか。

林田 日頃、工芸に接する機会の少ない人たちにもっと工芸を知ってもらえるような企画を作っていかなければなりません。また、つくり手のみならず、使い手、流通などの繋ぎ手、素材提供者など、ものづくりを支える幅広い人たちで支援グループを作り、相互に交流しながら、今の時代に合った使われるもの、つまり「売れるもの」を作っていく工夫が必要だと感じています。更には、外国人に使ってもらうこと、そして外国で売れるようにすることも重要です。日本の素晴らしい工芸技術を活かし、どうすれば市場拡大に繋がるかの情報や知恵を共有する活動も必要だと思います。



21世紀鷹峯フォーラム「100年後に残る工芸のために」シンポジウム 国立京都国際会館ルームAにて

木下 「21世紀鷹峯フォーラム」は、京都から始まって東京、金沢で開催場所も移動していますが、各都市の開催の違い、特色をどう見ておられますか？

林田 最初に開催した京都は、なんといつ

ても日本の工芸の大拠点です。ちょうど琳派400年ということで、お声を掛けたら問題意識を共通に持ってくださる方々が早速連携して下さり、とても感謝しています。また、大きな収穫だったのは、特に若い人、子どもたちに対して工芸に触れてもらう機会を作ることがとても大事だということを皆さんが異口同音におっしゃって、それがその後の教育普及活動の広がりにつながっていきました。

東京は大消費地であり、関係機関も多く、111の機関による300のイベントが行われ、工芸の魅力を100日間かけて体感してもらうことが出来ました。同時に、JETROなどの協力を得て、日本の工芸品の海外輸出促進のためのノウハウや体験を共有する機会も持てたので、さらに連携を深めたいと思います。

今年の10月から11月の石川・金沢では、地域を挙げて賛同していただき、参加機関が約60、イベントが180近くで、かなり大きくなりました。江戸時代に、加賀藩が特に文化に力を入れてきた歴史があり、今も県内各地で多種多様な工芸品が盛んに生産されており、生活の中にも工芸が息づいています。今回は、特に工芸を活かした観光モデルを示すような取り組みに特色を持たせました。地域振興には工芸の振興が大きな力になるとの認識が広がればと願っております。

国際的拠点であり 交流の場となる京都の役割

木下 2019年には、国立京都国際会館を会場として、世界博物館会議の開催が決定しました。また、文化庁の京都全面移転も決定し、今後ますますこの京都国際会館が担う役割も大きくなると思います。今、推進され

ている工芸のテーマを、この京都国際会館でもうま取り入れていただきたいと思います。

林田 ありがとうございます。一人でも多くの国内外の方に日本の工芸に触れてもらう機会が増えるように願っております。特に若い人たちに工芸の魅力に気づいてもらうような活動の重要性について触れましたが、実際に子どもたちが美しいものを作ってみることによって心が養われているという報告もされています。多くの良い活動が行われるよう



に、モデルを示していくことにも取り組んでいきます。数年後には文化庁の京都移転が決まっていますが、この移転には文化のみならず産業的な振興や地域振興も含め、また国際交流の拠点としての活動を充実することによって、京都で文化庁の機能を高めていきたいという狙いがあります。その活動の重要テーマとして工芸も取り込んでいただき、様々な提携と交流がこの京都国際会館で開かれる会議に取り入れられる流れになってほしいと期待しています。

木下 日常の生活の原点にさかのぼって、より一層、多くの国民に工芸の技、思想が浸透していくことを目指して会館も努力してまいります。

インタビュー
国立京都国際会館 館長 木下 博夫

1943年生まれ。国土事務次官、阪神高速道路(株)社長などを経て、2012年3月から館長・常任理事を務める。

第23回 世界神経学会議

XXIII World Congress of Neurology WCN2017

【合同開催】第58回 日本神経学会学術大会

神経内科の明日を拓く



※オープニングセレモニー メインホールにて

世界神経学会議は、神経内科学の分野で唯一かつ最も歴史ある国際会議です。1931年の第1回から2017年の本会議で23回目を迎えます。

第23回世界神経学会議(WCN2017)と第58回日本神経学会学術大会の合同開催が、2017年9月16日～21日の6日間、国立京都国際会館にて行われました。近年に京都で開催された国際会議の中でも最大規模で、過去に開催された世界神経学会議の中でも最大人数となる120カ国8,641人の参加者を迎え、「神経内科の明日を拓く」をテーマに様々なディスカッションが行われました。

同会議は2011年より誘致の準備を始め、ロビー活動やPR、プレゼンテーションを経て、2013年のウイーンでの世界神経学会議にて、韓国・香港といった他国候補地を抑えて京都での開催が決まりました。国立京都国際会館では1981年の第12回会議以来36年ぶり、2度目の開催となります。

オープニングセレモニーには秋篠宮殿下・妃殿下にご臨席賜り、会期中は山中伸弥氏などノーベル賞受賞者3名を迎えてのプレナリー・レクチャーをはじめ、世界の神経学・脳科学に関係する医師や研究者による最先端の研究発表を聞き、議論に参加できる場となりました。合間には、茶道やいけばな、着付け体験など、京都ならではの日本文化体験も行われ、海外からの参加者にも大変好評を得た国際会議となりました。

DATA ■ 開催日 2017年9月16～21日 ■ 参加国 120カ国 ■ 参加人数 8,641人(海外:3,530名、国内:5,111名)



第23回世界神経学会議大会長
国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター理事長
水澤 英洋 氏

▶ 今回の学会が開催された意義と成果について、今後それは私たちの暮らしや社会にどのような影響を与えるものなのでしょうか？

私たちが日常何気なく行っている、歩く、走る、しゃべること、或いは熱い、冷たいと感じる感覚、これら全てをコントロールしているのが神経です。神経が悪くなると、歩けない、しゃべれない、ものが見られない、暑さや寒さを感じないなど大きな障害が起こります。そういった障害に対して診断を行い治療するのが神経内科です。

高齢化社会が今後の課題となる今、認知症やパーキンソン病、筋肉の病気である筋ジストロフィーなど、私たちの生活にとって身近で重要な神経疾患は年々増えてきており、そのような病気に関する最新の治療法の発表や、様々な切り口からのディスカッションを行い未来に対する答えを示したことがこの会議の使命であり、大きな成果だと思っています。

▶ 開催地として選ばれるまでに他国との激しい競争があったとお聞きしています。誘致成功のポイントはどのようなことだったのでしょうか？

一番は、日本への信頼に尽きると 생각합니다。日本は欧米の膨大な

研究業績に比肩するような成果を輩出してきたという学術的信頼など、我々の先輩方が国際社会の中で何十年もかけて積み重ねてきた信頼は非常に大きかったと思います。時間が正確で、参加者のスムーズな会場への transportasi など、運営に関する面でも高く評価されたのではないかと考えています。もちろん、伝統と最先端の現代が共存する日本とその文化への関心は高く、安全で清潔な社会と人々のお持てなしの心も多くの人を魅了したと思います。

▶ 京都で開催されたことの印象はいかがでしたでしょうか？

京都の観光的な魅力もまた誘致成功に一役買っていたと思います。日本を代表する都市としての国際的な知名度、競争力、そして京都は日本人の心のふるさとだという印象を私も持っていますが、そのような京都での開催は、海外の方にも、学術面以外で日本の伝統、産業、観光を味わっていただくのに役立ったのではないのでしょうか。

▶ 国立京都国際会館へ一言お願いします。

50年前に建てられたモダンな建物は、今見ても新しい感じがしますよね。現代的な雰囲気も持ちつつ伝統的な庭園もあるこの会館で、2度目となる世界神経学会議を開催できたことは大きな喜びです。

誘致活動の時から準備会議にも入っていただき、国際会議の運営会社とも直接やりとりができる環境にあったことで会館には非常に信頼があったと思います。来年完成するニューホールによって、収容人数もより多くなると聞いていますので、京都での国際会議がより活発になることを期待しています。



第58回日本神経学会学術大会大会長
公立大学法人福島県立医科大学
医学部神経内科 教授
宇川 義一 氏

▶ 今大会は日本神経学会学術大会と世界神経学会議との合同開催となりましたが、どのような意義があったのでしょうか？

本来、国際学会では英語のセッションしかないのですが、今回は日本語のセッションも行ったので、英語がまだ不得手な若手の先生でも参加しやすく、知識を得てもらえたことは有意義

だったと思います。また、国際学会の中では最先端知識を習得し、世界のリーダーたる先生方と知り合い議論できる絶好の機会になったと思います。

▶ 発展目覚ましく注目度も高い神経学ですが、近年の成果と将来の展望をお伺いできますか。

神経学は大きく進歩しており、我々が授業を受けていた30年前には治らないとされていた病気が実際に治せる状況になってきています。この20年ほどの間に遺伝子の研究が進み、変性疾患と呼ばれるパーキンソン病やアルツハイマー症など病気の原因がわかってだけでなく、治療できる一歩手前が、治療できる段階まで進んでいます。高齢化社会が進めば当然このような疾患は増えてくるので、神経学が果たす役割には大きなものを感じています。

国立京都国際会館 スタッフVOICE

今回の会議では、海外の主催者等と直接やり取りを行いました。運営統括責任者、Audio & Visual責任者、IT関連責任者など、明確に仕付けられた各分野のスペシャリスト達と、事前の打合せ段階から、極めて細かい内容まで打合せをしていくこととなり、特に重要な事項に関する打合せは、都度TV会議を行い、お互いの認識のズレがないように擦り合わせるよう掛けました。そういった事前の詳細の打合せが十分に出来たことで、当日は非常にスムーズに進行し、無事に終了することが出来ました。



2020年に「第14回 国際連合犯罪防止刑事司法会議」決定

オール京都体制による積極的誘致が奏功

国立京都国際会館で2020年4月に「国連犯罪防止刑事司法会議（コングレス）」が開催されることになりました。1970年に同会館で開かれてから半世紀ぶり。世界約150カ国から4,000人以上が参加予定で、建設中の多目的ホール「ニューホール（仮称）」も活用する予定です。

コングレスは5年に1度開催され、世界各国の司法担当大臣や検事総長、非政府組織（NGO）関係者らが集まり、テロ対策や再犯防止策などについて論議し、国連加盟国が実施すべき方策を多く含む政治宣言が採択されます。当館における、国連主催の大規模な国際会議は、

1997年の地球温暖化防止京都会議（COP3）以来のこととなります。

国連が主催する本体会議のほかに政府、京都府・京都市、国際機関、NGOなどが主催するサイドイベントなどの関連行事やレセプションなどの歓迎行事も開催されることになっています。

8月の開催決定後には、上川陽子法務大臣が国際会館を訪れ、木下博夫館長から国際会館の概要について説明を受けた後、メインホールや庭園などを視察しました。上川大臣は記者団に「国際会館は会場と自然が一体となった和の空間。各国の要人に対して最高のおもてなしができる」と語りました。



メインホールを視察する上川法務大臣（左）と木下館長（右）



視察中の上川法務大臣

Information Vol.05 ニューホール 建設工事

ニューホールの外観が徐々に姿を現してきました!!

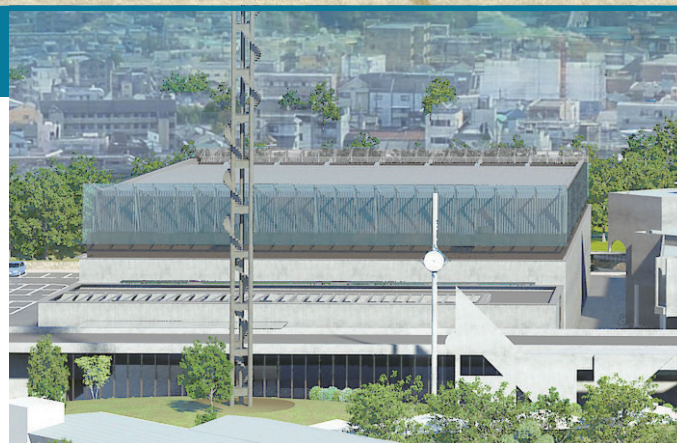
国際会館では、来年6月末の完成に向けて、多目的に利用できる新しいホールの建設を進めています。

右の写真は、将来ニューホール正面（西側）の「顔」になるガラス屋根を支える鉄骨トラス部分です。独特の形状で印象的な外観を構成するだけでなく、自然換気や集熱・排熱等の環境性能も担うこととなります。今後も安全第一で工事を進めてまいりますので、引き続きご理解を賜りますようお願いいたします。

～駐車場のご利用について～

工事期間中は駐車場のご利用を制限させていただきます（詳しくはホームページをご覧ください）。ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解・ご協力を賜りますようお願いいたします。

※今後も、このコーナーでは、ニューホール建設工事の様子をお知らせしていく予定です。



▲ 上：完成時イメージ図、下：ガラス屋根を支える鉄骨トラス

Event Calendar

2017年 11月 → 2018年 1月

催事名	日程
第10回 国際毛髪研究学会	2017年 10月31日－11月 3日
古典の日フォーラム2017「五周年記念式典」	11月 1日
第51回 日本てんかん学会学術集会	11月 3日－5日
第33回 京都賞授賞式・記念講演会・記念ワークショップ	11月10日－12日
第64回 日本臨床検査医学会学術集会・第29回 世界病理臨床検査医学会連合会議 WASPaLM2017	11月15日－19日
第64回（平成29年秋）宝松庵茶会	11月23日
ATACカンファレンス2017京都	12月 1日－3日
第13回 京都橘大学看護国際フォーラム	12月 3日
インターンシップ&仕事研究LIVE 京都	12月 3日
第30回 日本内視鏡外科学会総会	12月 7日－9日
地球未来シンポジウム2017「希望の探求」	12月10日
日本歯周病学会60周年記念京都大会	12月16日－17日
第12回 地球研国際シンポジウム	12月20日－21日
第21回 日本病態栄養学会年次学術集会	2018年 1月12日－14日
公益社団法人日本青年会議所2018年度京都会議	1月18日－21日
第41回 日本眼科手術学会学術総会	1月26日－28日

Event Report 開催報告

乾杯の夕べ2017 地中海料理と花火で乾杯! 7月21日－22日

真夏の恒例自主企画イベント、「乾杯の夕べ」を開催しました。今年のテーマは地中海。館内と庭園を開放し、彩り豊かな地中海料理屋台が並ぶなか、延べ3,000名の市民が賑やかな夜を過ごしました。水上ステージでは地中海ミュージックのライブ演奏が会場を盛り上げ、館内では地中海関連の食品やグッズ販売、クルーズやオリーブオイルの文化紹介セミナーなど多彩な内容で、お子様からご年配の方まで楽しい時間を過ごしていただきました。庭園の池にヨットを浮かべ、イルミネーションが映えるなか、イベントのフィナーレは打ち上げ花火。宝ヶ池の水面から上がる大輪の先に、歓声が上がっていました。



Pick up ピックアップイベント

第64回 日本臨床検査医学会学術集会・ 第29回 世界病理臨床検査医学会連合会議 WASPaLM2017 11月15日－19日

「次世代の医療の進歩への貢献“Contribution to Medical Innovation for Next Generation”」をテーマに、日本臨床検査医学会学術集会と世界病理臨床検査医学会連合会議が同時開催されます。国際会議は2年ごとに開催され、日本では1983年に第12回会議が東京で開催されて以来、34年ぶりの開催となります。あらゆる臨床検査医学領域にわたり、国内外の第一線の研究者による特別講演やシンポジウム、一般演題の発表を予定しています。

第19回 日本認知症 グループホーム大会（京都） 9月9日－10日

認知症対策の未来を共に切り拓いていく第19回日本認知症グループホーム大会が開催されました。今回は「手と手をつなぐ 認知症支援の輪～認知症グループホームの生き残りをかけて～」をテーマに、全国の認知症グループホーム経営者や介護スタッフら約1,000人が参加しました。初日は開会式や基調講演などがあり、清水寺の森清範貫主が「心の形（すがた）」と題して特別講演も行われました。2日目にはシンポジウムが開催され、認知症の当事者やその家族らが認知症支援について意見を交わしました。



京都で、
会いましょう。京
Kyōの

おもて舞台うら舞台

明治の英傑と時代の作庭家が造った美庭「無鄰菴」



明治維新後、東京遷都により一時的に衰退した京都を復興させるため、岡崎・南禅寺界隈に琵琶湖疏水を利用した開発が行われました。景観を守るべく別荘庭園群が造営されることとなり、新しい社交場も生まれました。その先駆けとなった別荘が、明治・大正の政治家である山縣有朋が造営した無鄰菴です。

無鄰菴は、母屋、洋館、茶室の3つの建物と、有朋自ら設計・監督し、近代日本庭園の先駆者として知られる作庭家・七代目小川治兵衛が作庭した野趣あふれる近代日本庭園の傑作として知られています。母屋から眺める東山とした芝生の丘の光景は類まれな景勝であり、また琵琶湖疏水から流れを引いた池に配された瀬落ちにより奏でられる水の音が心地よく響き渡ります。約70種類以上の苔や季節の草花も、有朋が大事にしていた自然趣向を受け継ぎ、今も大切に育まれています。

この庭園を愛した有朋は、夫人を連れてしばしば訪れたのだとか。多忙を極める公務の中で家族とゆとり過ごすひとときは何物にも代えがたい時間だったことでしょう。

併設の煉瓦造二階建の洋館には、山縣有朋、伊藤博文、桂太郎、小村寿太郎の4人による日露戦争開戦直前の外交方針を決めた「無鄰菴会議」が行われた部屋があり、当時のままに保存された空間を見学することが出来ます。折しも来年2018年は明治維新150周年の節目の年。日本近代史の舞台裏にもなった名勝・無鄰菴を是非訪れてみてください。

アクセス ◆ 京都市左京区南禅寺草川町31

市営地下鉄東西線「蹴上駅」下車

開場時間 ◆ 「4～6月／9～10月」8時30分～18時

「7～8月」7時30分～18時

「11月」7時30分～17時

「12～3月」8時30分～17時

(受付は開場30分前まで)

休場日 ◆ 12月29～31日

入場料 ◆ 410円(小学生未満無料)

電話 ◆ 075(771)3909

